

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、問題の都合上、本文を一部改めた箇所があります。

——第二次世界大戦（日本が中国やアメリカと戦っていた戦争）の終わりの頃、八才の茉莉は自分の家と近所に住む朝比奈の家の二つの家でかわいがられて育っていた。本文は、激しい空襲（飛行機からばくだんを落とし、工場や町を焼きはらうこと）を受けた後、みんなを探しながら茉莉が焼け跡を歩く場面から始まっている。

長く続く塙際には、幾人もの人がうずくまったまま、動かないでいた。外で空襲に遭ったときは塙に沿ってうずくまり、爆風でやられないよう親指で耳をふさぎ、その他の指で目を押さえるように教わっていた。動かない人たちは、茉莉もこれまで何度も練習した防空訓練通りの退避姿勢を取っていた。

久保山（横浜市の地名、墓地がある）のほうから坂を降りてきた男が、うずくまる女の横で塙に背もたれて動かない男の懐に手を入れて、財布を抜き取った。茉莉が見ていることに気づくと、茉莉にむかってにやつとわらい、別の人のそばに行つて、またその懐に手を突っこんだ。

① 茉莉は踵を返し、家のあった場所に駆けもどった。

日が暮れると、黒い雨が降ってきた。茉莉は自分の家の焼け跡で、焼けた板の下に体を半分さし入れ、少しでも雨にぬれないようにして眠った。五月の末なのに寒く、猫を抱いてぬくもりにした。母はいつもの猫にえさをやっていたので、生き残った近所の猫たちはみな茉莉に馴れていた。

破裂した水道管から水がちよろちよろ流れていた。茉莉は喉が渇くと、猫と一緒にべちよべちよとそれを飲んだ。その日、空襲の後で茉莉が口にできたものはそれだけだった。

あくる朝、茉莉が朝比奈の家の庭で猫を抱いてすわっていると、近所の人たちが十人ほど入ってきた。茉莉がいることに気づくと、だれも見えてはいけないうものを見てしまったように目をそらした。茉莉は家によく来ていたおじきさんを、そしておじき

さんを見た人の顔を思い出した。そういう風に見てはいけないと、茉莉の母はいつも言っていた。

おじきさんだつて、好きでしてるんじゃないんだよ。

② 茉莉は母の言葉を思いだし、初めて、その言葉を本当に理解した。

近所の人たちは茉莉に声もかけずに庭を掘りはじめた。そして、朝比奈の母が育てていた、まだ小さいじゃがいもを掘りかえし、庭で火を熾して、鍋で煮はじめた。醤油とサトウの香ばしいにおいがあたりに広がった。

煮ところがしができる、近所の人たちは、茉莉がいつもままごとをしていた阿波青石（徳島名産の青い石）の上に鍋を置き、小皿に取り分け、石の上に並べはじめた。

そのじゃがいもは、おばあちやま（朝比奈家の母を茉莉はこう呼んでいた）のじゃがいもなのに。

茉莉は猫を下ろし、思わず石のそばに近寄った。文房具屋のおばさんが茉莉の前にじゃがいもをよそった皿を置いて言った。

「茉莉ちゃん。朝比奈さんも死んじゃったわね。茉莉ちゃんかわいがってもらってたから、茉莉ちゃんが一番にお上がりなさいよ」

近所の人たちはめいめいに皿を取って、食べはじめた。空襲前、このじゃがいもは白い花を咲かせていた。茉莉は花をむしってごはんにし、この石の上で遊んだ。朝比奈の母は茉莉を叱らず、ただ、「この白い花がおばあちやまはだいすきなよ」と言った。茉莉は皿のじゃがいもをぼうつと見ながら、そう言った朝比奈の母の顔を思い出していた。

そのとき、隣りにすわっていた近所のおじさんが、自分の箸で、茉莉の皿のじゃがいもを突き刺して取って食べた。茉莉は声を上げることもできなかった。その間に、もうひとつ、もうひとつ、と取って食べられ、茉莉の皿は空になった。

まだ鍋にはじゃがいもが残っていた。茉莉はそれを求める手段を知らなかった。これまで、求めなくても、いつも与えられてきた茉莉だった。茉莉は猫を抱き、朝比奈の家の庭を出た。

自分の家の焼け跡に戻ると、瓦礫で見えなくなっていた防空壕（空襲時にひなんす）の入り口がいつの間にか片付けられ、入れるようになっていた。中は焼けていなかった。その晩はそこにもぐりこんで眠った。

翌朝、特別配給（食べ物などが配られること）があつたらしく、町会の人たちがこどもたちにキャラメルを配りはじめた。こどもたちは喜んで歓声を上げた。だれもがキャラメルなんて、いつから食べていなかったのか忘れてしまうほどだった。茉莉はその声を聞いてそばに寄つていったが、白い割烹着を着たおばさんたちは茉莉にはくれないかった。茉莉はあきらめて、そこを離れた。

同じ隣組（戦時中に作られた地域住民の組織）の家の焼け跡の前を通り、その家の防空壕に、青い布団（ふとん）が引きこまれているのが見えた。その青い布地には見覚えがあつた。弟の枕元で母がトいていた晴れ着の縷子地（ある布地）だ。例えば、茉莉の家の防空壕には布団の他にも、食糧や衣類など、いろいろなものがしまわれていたはずだった。父や母がせつせと運び入れていたのを、茉莉は見ていた。けれども、防空壕の入り口はいつの間にか開いて、いつの間にか中の物は失われていた。

立ちすくみ、青い布団から目を離せないでいると、じやがいもをくれたおばさんが後ろから追いかけてきた。

「茉莉ちゃん、もらつてないんでしょ」

おばさんの声は隣組に気兼ねしているのか、ひそやかだった。茉莉が頷くと、おばさんは、茉莉の手のひらに、キャラメルを一粒のせてくれた。茉莉はおどろいておばさんを見上げた。

「落とさないでね。どこかで食べてね」

おばさんはそうささやくと、茉莉の小さな手をおばさんの大きな固い手で包みこんだ。茉莉が決して落とすことのないように、ぎゅっと。

おばさんがいなくなるのを見送つてから、茉莉は学院（関東学院という学校。茉莉はこの階段からよく景色をながめていた）の階段で食べようと歩きだした。そこへ別のおばさんが来て、茉莉の前に立ちふさがつた。

おばさんは一言も話さず、茉莉が握らせてもらつたばかりの小さな手の指を、その太い指で一本一本開かせ、キャラメルを奪つた。そして、傍らにいた自分のこどもにそれをやった。

③ 茉莉は、おばさんの着ている白い割烹着が眩しくて、目がくらんだ。

おばあちやまのすきだった白いじやがいもの花。おかあちやまがくれると約束してくれた空のように青いお布団。紫色に膨れ

あがつた女の子の顔。道路に流れた赤い血。真つ黒に焼けた家。階段から見ていた空と海。空に浮かんだ白い雲。なにもかもが眩しくて、茉莉はもう目を開けていられなかった。

空襲から幾日たったのか、茉莉にはわからなかった。

どこにも行くあてがなく、猫を抱いて焼け跡をさまよつていた。焼け跡といつてもなかなか火は消えず、まだぼこぼこあちこちで燃えていた。雨が降ると火は消えたが、しばらくすると、またぼつと火がついた。

茉莉は猫を抱き、暗闇のあちこちでフイにぼつぼつと火がつくのをみつめていた。自分が寝ている間に火がついて、焼けてしまったことをおそれていた。

茉莉はまだ生きのびるつもりだった。ひとりぼっちでも、たしかに、死ぬことをおそれていた。

道には黒こげになった死体がごろごろと転がっていた。それらの死体は初夏の日差しのもとで腐りはじめており、軍や学徒動員（国が学生を強制的に働かせたこと）の学生たちがトラックで回収にやってきた。鷹口（先の曲がった鉄製の長い棒状のもの）で死体を引っ掛けては引き寄せ、二人一組で死体の手と足を持つては「一、二、三」と掛け声をかけて、死体をトラックの荷台に放りあげ、堆く積みあげていった。

「久保山に埋めるらしい」

近所のおじさんやおばさんたちがその作業を眺めながら話していた。

茉莉は、大人たちの話し声を後ろに、そこを離れた。

学院の運動場に続く階段まで歩いていったが、そこで倒れて、動けなくなった。

茉莉は母や父たちが死んだということが、やっとわかりはじめていた。生きていれば茉莉のそばにいてくれるだろうし、茉莉に食べものもくれるだろうし、膝にのせてもくれるはずだった。

自分のそばにだれもないということは、母も父もみんな死んだということ。そして自分は生きている。

道に倒れている人たちは死んでいた。踏んづけてしまいそうになった、自分と同じくらいの年の女の子も死んでいた。おかあ

ちゃまもおとうちゃまもみんな死んでいる。だからここにいない。
わたしだけは生きている。

④ 茉莉は初めて、自分がほかのだれともちがう存在であることを知った。死んでいる人たちと生きている自分はちがう人間。決してとりかえることはできない。

わたしはわたし。

茉莉には世界がちがって見えた。自分だけがいて、あとの人たちはみんな自分以外の人たち。たくさん自分以外の人たちがいる。死んでいる人も生きている人も。数えきれないほど。

そして、生きている自分は、決して死にたくはなかった。

茉莉が階段に横たわっていると、雀が飛んできた。

見渡す限り焼け野原となつて緑がなくなつた景色の中、茉莉が動かないので気づかないのか、雀たちは茉莉の目の前ではたとと羽ばたきをした。

茉莉は雀たちをかわいいと思つた。茉莉はいつでも、きれいなものとかわいいものがだいすきだった。

「ちいちいばっぱ ちいばっぱ

雀の学校の先生は

むちを振り振り ちいばっぱ」

茉莉は歌つた。空襲でひとりぼっちになつて以来、初めて歌つた歌だった。
すると、どこから声がした。

「茉莉ちゃん」

茉莉は目を開き、それまで自分が目をつむっていたことに気づいた。

「茉莉」

開いたばかりの茉莉の目に、勝士と清三（朝比奈の家）が運動場を走ってくるのが映つた。

「茉莉ちゃん、生きてたんだね」

二人とも、顔も国民服（戦争中に着用すべきとされた軍服に似た服）もすすで真っ黒だった。

茉莉は起きあがり、そのとき初めて、声を上げて泣いた。

「どこにいたの、茉莉は」

「ごめんね。茉莉ちゃん、みつけてあげられなくて」

勝士は茉莉を抱きしめて言った。

いくら泣いても、「茉莉ちゃんは歌が上手だね」と褒めてくれた朝比奈の母はもういない。

「死んじやったと思つてたよ。よく生きていたね」

「おなかすいたろう。さあ、これ食べな」

勝士は手のひらに高粱（穀物の一種）のまじつたおむすびをのせてさしだしてきた。

「炊き出しがあつたんだよ」

「ぼくたちはもう食べたから」

茉莉はおおずと手をのばした。久しぶりの食べ物に、頭は飢えていたが、食べ方を忘れたように口が動かなかつた。ゆっくりかみしめながらおむすびを食べている間、二人はうれしそうに茉莉が食べるのをみつめていた。

茉莉は満洲（中国東北部の旧地域名、当時日本が進出していた）に行つたときのことを思い出した。

川べりの寺で、美子（満洲でできた友達。こどもだけで遠出をして帰れなくなり、一晚を過ご）は、自分のおむすびを茉莉にくれた。茉莉はその手を思いだした。

はじめにわたしにくれた。わたしに一番大きいかたまりをくれた。わたしが一番おちびちゃんだったから。
あとき、わたしはお礼を言つただろうか。

茉莉は思いだせなかった。

きつと言つてない。

これまで、茉莉はいつでもどこでも自分が一番大事にされるのがトウゼンだと思つていた。おれを言うほどのことでもなかった。

⑤ おぼえているのは、全くためらいなくさしだされた美子の手と、美子が自分をみつめていた優しい顔だけだった。

よつちゃんはずいぶんよかったんだらう。

茉莉の手に、今はおむすびがあつたが、力づくで指を開かれたその感触は消えなかった。

わたしの手のひらからキャラメルを奪った人、防空壕を暴いてうちの物を取つていった人、おばあちやまの畑のじゃがいもを掘り起こして食べた人、死んだ人の懐から財布を盗んだ人、この世界は、そんな人たちばかりなのに。

「食べるものがなくてね、ぼくたち、革靴の底の革を食べたんだよ。そしたらおなかをこわしちゃつて」

清三が言った。

「靴の底が焼けるためみたいになつてね、おいしそうだったんだよ」

茉莉はわらつた。

勝土はその笑顔をじつとみつめて言った。

「茉莉ちゃん、本当によく生きていたね。朝ごはんを二回食べたのがよかったのかな（空襲の日の朝、茉莉は自分の家と朝比奈の家のそれぞれで朝食をとった）」

「そういえばそうだったね」

清三がわらつた

「ぼくも食べてりやよかったよ」

「かつちゃんはどこにいたの？」

「蒲田に建物疎開（空襲時の延焼を防ぐため、あらかじめ建物を取りこわすこと）に行つてね、横浜が焼けるのを見た。真っ黒い煙に、焦げた紙が蒲田まで飛んできてね、もう横浜は終わりだつて言つて、電車もみんな止まつてるから歩いて帰つてきたんだ。家があんまり焼けてるから、

きつと逃げてるんだろうと思つて、キュウゴシヨをあつちこつち、探して回つてた」

「ぼくは学校（清三は関東学院）の兵器ゴに避難してた。バケツリレーして本館が焼けるのを食いとめてね。院長先生は立派なおひげを焼かれてしまわれたんだよ」

清三はおどけて言つた。茉莉はわらつた。

「清三は焼けたされた人たちを助けてたんだよ。それで学校のキュウゴシヨでやつと会えてね、それから二人で探したんだけど、でもどこへ行つてもいなくてね。黄金町の駅前の広場に死体の山ができてるからつて、そこへ行つて、筵（わらなどを材料に）をめぐつて見てね、でもわからなくて。市電通りもトタンをかぶせてあるのをめくつて見てね。久保山にも死んだ人が集められて山になつてたから、見に行つた。どうしてもわからないから、もういっぺんここを探してみようと思つたんだよ」

「茉莉はどこにいたの？」

「運動場の防空壕」

「茉莉ちゃんだけ？」

勝土に訊かれ、茉莉はおずおずと頷いた。清三はすすと血に汚れた手で顔を覆つた。

「そうか」

⑥ けれども勝土は茉莉にわらつて見せた。

「じゃあ、やつぱり、みんな、ここにいるね。みんなを探してあげないとね」

それから、茉莉は勝土と清三と一緒に家の焼け跡を手で掘つた。焼けた瓦をどかして、真っ黒に焼けた材木を持ちあげる。配給米を搗く（げん米を白米にする）のに使つていた一升瓶が、水飴のようにとろりと溶けて固まつていた。茉莉は白いごはんがすぎだからと、母はいつも時間をかけ、丁寧にセイハクしてくれた。

はじめにみつかったのは茉莉の父親だった。周りに白いタイルが散らばつていたので風呂場だとわかった。真っ黒に焦げていたが、ベルトのトメ金はたしかに見覚えがあつた。

よほどに気に入っていたのか、なにかいわれのあるものだったのか、茉莉がいくら非国民だと言っても、父親はわらって、金属回収（戦争のため国が金）に出さなかったため金だった。

そこから周りを掘っていくと、近くにやはり真つ黒に焦げた死体があった。茉莉の母親だった。うつぶせになっていたのを勝土と清三でひっくり返すと、その下には弟の幸彦（ゆきひこ）がいた。お誕生日前（一才の誕生日前）で外へ出ることも殆どなく、真つ白い顔をしていたのに、黒くなって死んでいた。

母は幸彦を抱きしめていたらしい。胸のあたりが焼けておらず、着ていたものが焼け残っていた。茉莉は、あちこちが黒く焦げながらもモヨウのはっきりわかるその布地を知っていた。

小さな薔薇の花。

茉莉の母は、緋（かすり）の着物ともんぺ（ズボンのよ）の上下の中に、茉莉のすきだった薔薇の花の柄（がら）のブラウスを着ていたのだ。

「おふくろ（勝土と清三は、茉莉の母をこう呼んでいた）らしいね。銃後（じゅうご）でもおしゃれを忘れないで」
勝土はつぶやいた。

清三が焼けトタンを探して持ってきたので、茉莉は自分で幸彦の小さな体を持ちあげた。

茉莉は勝土と清三とともに、父親と母親の体も、ひとかけらも残さないように手で掬い、指でつまんで、トタンの上にのせた。

朝比奈の家の焼け跡では、朝比奈の父が崩れた軒（のき）の下に横たわっていた。そして、朝比奈の母は最後にみつかった。倉の中にいたらしい。

「お母さん、わかってたのかな。茉莉ちゃんに二回もごはんを食べさせて」

勝土はどこへともなくつぶやいた。

勝土と清三が庭に穴を掘り、死体を穴に並べた。勝土が油をかけ、火をつけた布を投げると、ぽつと火がついて燃えあがった。骨壺（こつぽ）はなかったが、白木の箱とそれを包む白い布は配られた。そのころ、焼け跡のあちこちで家族や親戚（しんせき）を茶毘（だび）に付す

（遺体を焼くこと）煙が上がっていた。どこへ行ってもヘイジでは耐えられないほどの臭い（にお）に満ちていたが、いつのまにかだれもが慣れきっていた。

茉莉の両親と弟の骨はひとつにして、白木の箱に入れ、白い布で包んだ。

茉莉はそれを何度か見たことがあった。戦死した英霊（えいれい）（戦死者の魂をうやまつていう語）を迎えるときと同じ。初めて駅で見たとき、幼い茉莉は

「兵隊さんはどうやってあんなに小さい箱に入るの？」と訊いて、両親を困らせたものだった。あのとき、茉莉たちは海水浴に出かけるころだった。まさか銃後の両親たちが同じ箱の中に入る日が来るとは、茉莉は思ってもみなかった。

それから茉莉は、勝土と清三とともに防空壕で雨をしのぎ、焼け跡で生活をした。

ただ、食べるものはなにもなかった。朝比奈の家も茉莉の家も焼き尽くされていた。そして、防空壕に入れてあったはずのものは奪われていた。配給はただではない。金がなくては、配給切符（ききふ）があってもなにも買えないのだ。

「おふくろの大福もちが食べたいなあ」

焼け残った電信柱（当時は木でできていた）の真ん中の白いところを割って、噛みながら清三がつぶやいた。茉莉はその言葉を聞いてようやく、自分の母親の永遠の不在を知った。死体を持ちあげて運び、焼いて骨にしたのに、それでもその不在が決定的なものとは、まだ思えていなかった。

もうおかあやまには会えない。

茉莉はやつと悟（さと）った。

もう二度と。

おとうちやまにもゆきちゃんにも。おばあちやまにもおじいちゃま（朝比奈家の父を茉莉はこう呼んでいた）にも。

約束しておけばよかった。青いお布団とか絵本とかおままこと（朝比奈家の父を茉莉はこう呼んでいた）の道具なんか、どうでもよかった。

おかあちやまが死なないで、わたしのそばにずっといてくれることを、指きりげんまんしておけばよかった。

清三は近所で炊き出しがないか、探しにでかけた。茉莉は清三に割ってもらった電信柱のかけらを噛みながら、勝土と焼け跡を

片付け、金に換えられそうなものがないか探した。昼近くなって戻ってきた清三は、新聞紙の包みを持っていた。

「どうしたんだ、それ」

勝士がおどろいて訊ねた。

「曙町の工事現場でヒロつてきた」¹¹

清三は阿波青石の上で新聞紙を広げた。中からアルマイト（アルミニウムを加工したもの）の弁当箱が出てきて、蓋を開けると、高粱と菜っ葉の混じったごはんが詰められていた。黄色いたくあんも添えてある。茉莉は唾を飲んだ。

「すごいだろう」

清三が言いおわらないうちに、勝士は弁当を取りあげた。荒々しく蓋をしてばさばさと新聞紙で包み直す。久しぶりのごちそうは夢のように消えた。

「戻してこい」

勝士は弁当を清三の前に突きだした。

「おまえのやったことは泥棒だ」

勝士の顔は真っ赤だった。

「お母さんとお父さんが生きてたらどれだけ嘆かれるか。すぐに戻してこい。いや」

勝士は清三の腕を掴み、歩きだした。

「兄さんも一緒に行く」

清三はうなだれたまま、勝士についていった。

茉莉は阿波青石に腰掛け、猫を抱いて二人が戻ってくるのを待った。一目だけ見た弁当が消えてしまったことが残念でたまらなかつた。けれども、勝士の言葉はそれ以上に胸につきささった。

泥棒。

人の弁当を見て、食べられることを喜んだ自分だって、清三と同じ、泥棒だった。

死体の懷に手を入れたおじさん、じゃがいもを取ったおじさん、キャラメルを奪ったおばさん、青いお空の布団を盗んだ近所の人。あんなに憎いと思ったのに、自分だって同じだった。

茉莉は自分の手のひらを見下ろした。ぎゅつと開かれて奪われた感触。まだこの手に残っていた。でも。

奪われたキャラメルは、おばさんの傍らにいたこどもに渡された。きっとその子も茉莉と同じ、空襲で家も衣類も食糧も焼き尽くされたこどもなんだろう。キャラメルを奪ってきてくれる母がいるということだけが、茉莉とはちがつていた。

清三は自分に食べさせるために弁当を盗んでくれた。盗むのはいけないこと。そんなことはわかっていた。それなら、盗まないで、飢えて死んでしまうのはいいことなのだろうか。

茉莉にはわからなくなった。^⑧これまでずっと正しいと信じていたこと。それが揺らぎはじめていた。

茉莉は二人の帰りを待ちかね、遠くまで目をやった。だれもが草までむしって食べていた。取り尽くされて、初夏の焼け野原には雑草さえ¹²八えていなかった。

しばらくして戻ってきた二人は、もう弁当を持っていなかった。

泣いたのか、勝士の目も清三の目も真っ赤だった。

「茉莉ちゃん」

勝士は待つていた茉莉の前にしゃがみ、優しく声をかけた。

「このままここにいても、みんな飢え死にしてしまうからね、茉莉ちゃんは白楽（横浜の）のおばあちゃんの家に行こうか。焼け残っているかどうかわからないけど、明日行ってみよう」

茉莉の実の祖母は母の母で、白楽に住んでおり、朝比奈兄弟とも一緒に何度か遊びにいったことがあった。

「茉莉ちゃんもおなかですいたろう。もう少しだけ辛抱してね」

勝士は茉莉の頭をなでてくれた。茉莉は頷いた。

翌日、幸いに雨も降らなかったで、茉莉は勝士と手をつなぎ、清三に遺骨を持ってもらって、白樂の祖母の家にむかった。殆ど一日かけて歩いて行ってみると、茉莉の祖母の家は焼け残っていた。白樂もかなりやられており、茉莉の祖母の家の三軒先までは焼けていたが、そこで風向きがかわったらしい。

「茉莉―」

茉莉の祖母は茉莉を見るなり家から飛びだしてきて、茉莉をぎゅうっと抱きしめた。そして、茉莉以外の家族全員が死んだと知らされると、その場に泣き崩れた。

「おばあさん、茉莉ちゃんをどうぞよろしくお願いします」

勝士は茉莉の祖母に、深く頭を下げた。祖母は泣きながら、幾度も頷いた。

勝士は茉莉の前にしゃがみ、顔を掬いあげるように見上げて言った。

「茉莉ちゃん、必ず十年したら迎えにくるからね。いい子にして待つてるんだよ」

茉莉は頷いた。

「かつちゃんとせいちゃんはどこに行くの？」

「わからない」

それでも、勝士は茉莉にわらって見せた。

「もう学校にも行けないからね、働けるところを探して、お金を稼ぐよ。一緒に暮らせるようになったら、必ず迎えにくるからね」

勝士と清三は何度もふりかえっては茉莉に手を振り、焼け跡に戻っていった。

茉莉の祖母は、娘一家が茉莉だけを残して死んでしまったことに胸を痛め、茉莉が運んできたお骨の入った白い包みをぼんやり眺めながら一日を過ごすようになった。

ある夜、警戒警報ハツレイのサイレンが鳴ったが、祖母は起きなかった。やがて空襲警報が出たが、祖母は布団の上に起きあがっただけで、動こうとしない。茉莉が祖母の肩をたたいてせかすと、初めて茉莉がいることに気づいたかのように、茉莉を見た。

「そうだ、茉莉。あんたがいたね」

祖母はそうつぶやいた。早く娘のところに行きたいとばかり願い、孫娘のことを忘れていたのだ。

祖母は茉莉の頭に防空頭巾をかぶせ、町内の防空壕を教えた。

「これらの人はみんな入るんだから、ひとりでもいいから、行っておいで」

「おばあちゃんは逃げないの？」

茉莉の問いに祖母は「瞬口」もったが、言った。

「あんたひとりのほうが、早く走れるだろう」

「じゃあおばあちゃんも後から来る？」

「行くよ」

その言葉に背中を押され、茉莉は走りだした。灯火管制（夜間の空襲に備えて明かりが外にもれないようにすること）で町は真っ暗だった。

防空壕は近かった。白樂駅のすぐそばにあった。茉莉が入ると、中にはもうたくさんの人がいた。どの顔も知らない人だった。入り口近くにすわっていた男が茉莉の腕を掴んだ。

「おまえ、見たことのない子だな」

男は茉莉の真っ赤な鹿の子（一種）の、綿がたつぷりとつめられてふつくらとふくらんだ防空頭巾を見上げた。

「入っちゃだめだ」

男は茉莉の腕を掴んでいた手で肩を押し、茉莉を外へ押しだすと、防空壕の扉を中から閉めた。

爆音が響き、あたりはうってかわって、照明弾で昼間のようになつていった。茉莉は警報が鳴り響き、だれもが避難して

ヒトケのない道を走った。人間が滅びた町のようなだった。

祖母の家に戻ると、祖母は、茉莉が出ていったときのまま、同じところにぼんやりすわっていた。

「おばあちゃん、入れてくれなかったよ」

茉莉が訴えと、祖母ははつとして、茉莉を見た。

「そうかい。じゃあ、おばあちゃんと一緒に、おかあちゃまのところに行こうかね」

祖母はそう言うと、茉莉にテマネキをした。その目の前には仏壇があり、母親たちの遺骨の白い包みがあった。

茉莉は首を振って、後ずさった。

そっちには行きたくない。

空からはごおつという飛行機の音がした。空気にぐうつと押される感じがする。低い。そして近い。

わたしは死ぬわけにはいかない。朝比奈のおばあちゃんにもおじいちゃんにも、あんなにかわいがられたわたし。

わたしは生きのびなくてはいけない。

茉莉は表へ飛びだした。

防空壕まで走っていき、外から壕の入り口をどんどん叩いた。中から扉が開き、さっきのおじさんが顔を出した。

「わたし、町内の子です」

茉莉は怒鳴った。

「五十嵐茉莉です。中川のおばあちゃんのところにつ越してきました。入れてください」

こんなに大声を出したことはなかった。おじさんは後ろに下がると、茉莉を入れ、扉を閉めた。

「中川さんこの」

「空襲でみんな死んだって」

自分を見てささやく大人のほうは見なかった。空襲警報が解除されると、茉莉は走って家に帰った。

祖母の家は無事だった。祖母も仏壇の前にそのまますわっていた。

次の警報のときには祖母をひきずってでも防空壕に連れていこうと茉莉は思った。

けれども、それから間もなく、戦争が終わった。

負けたとか敗戦だとか大人たちは騒いでいたが、茉莉には戦争に勝とうが負けようがどうでもよかった。

さつさと終わらせなきゃしょうがないじゃないか。

母の言葉を思いだしていた。

さつさと終わらなかつた戦争がやっと終わった。

玉砕（玉がくだけるよう）するはずじゃなかったの？ わたしたち。

茉莉は信じられなかった。騒いだり泣いたりしている大人たちを見て、幾度も幾度も思った。

最後のひとりまで戦って、玉砕するはずじゃなかったの？ なんのためにみんな死んだの？

なんでおかあちゃまもおとうちゃまも死んだのに、まだ生きている人たちがいるの？

茉莉の問いにこたえるものはなかった。

日中戦争（一九三七年に起きた日本と中国の戦争）の始まった年に生まれた茉莉にとって、初めての、戦争のない日々が始まった。

（中脇初枝「世界の果てのこどもたち」）

問1 〓線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部A「めいめいに」(3ページ)・B「立ちすくみ」(4ページ)とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「めいめいに」(3ページ)

- ア それぞれに
- イ つぎつぎに
- ウ せつせと
- エ ちやくちやくと
- オ たんたんと

B 「立ちすくみ」(4ページ)

- ア 怒り^{いか}で立ち上がり
- イ 注目して立ち止まり
- ウ 悲しみで立つていられず
- エ 衝撃^{しょうげき}で足が震え^{ふる}
- オ 驚き^{おどろ}で足が動かず

問3 〓線部①「茉莉は踵^{かかと}を返し、家のあつた場所に駆けもどつた」(2ページ)とありますが、茉莉が「踵を返」そうと思つた理由を三十字以内で説明しなさい。

問4 〓線部②「茉莉は母の言葉を思いだし、初めて、その言葉を本当に理解した」(3ページ)とありますが、茉莉はなぜ理解できたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 空襲^{くうしゅう}で焼け出されて板の下で眠ったり、水しか飲めなかつたりして物のない生活を送つたことで、貧しさというものが自分のこととして理解できたから。
- イ 空襲で焼け出されるというきわめて深刻な状^{じょうきよう}況の中で猫^{ねこ}を抱^だいていたため、周りからのんきな子どもだと勘違^{かんちがひ}いされ、相手にされなくなつたから。
- ウ 空襲で焼け出されて食べ物^{えもの}が不足している状況で、じゃがいもを盗^{ぬす}みに来た大人たちの気まずそうな顔を見て、憐れみや同情を抱いてしまつたから。
- エ 空襲で焼け出されて何もかもを失つたときに、普段^{ふだん}つきあいのある近所の人たちが現れたのを見て、人から物をもらいたいと思ふようになったから。
- オ 空襲で焼け出されたために空腹のまま一人で過ごさなければならなくなつたのに、近所の人たちから見えてはいけないものを見るような目で見られたから。

問5 〓線部③「茉莉は、おぼさんの着ている白い割烹着^{かっぽうぎ}が眩^{まぶ}しくて、目がくらんだ」(4ページ)とありますが、このときの茉莉の様子はどのようなのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一人で生き残つた自分と比べて、周囲の支えがある人をうらやましく思っている。
- イ 楽しみにしていたことがいきなり奪^{うば}われてしまい、がっかりして生きる気力を失っている。
- ウ 生きるためには仕方がないが、汚^{きた}いことをする大人を見て怒りがわき起こっている。
- エ 次々と起こる衝撃^{しょうげき}的な現実を目^まのあたりにして、状況を受け入れきれず混乱している。
- オ 他人をかえりみない醜^{みにく}い人間の行動を見て、戦争の悲惨^{ひさん}さに心を痛めている。

問6

——線部④「茉莉は初めて、自分がほかのだれともちがう存在であることを知った」(6ページ)とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大勢の人が死んだ絶望的な状況でも、前向きに生きていこうと強い気持ちを持つている自分は特別な存在であると気づいたということ。

イ 死んだ人はきれいなものやかわいいものを見ることができないため、自分が生きていることはすばらしいと気づいたということ。

ウ 家族の死を理解しはじめた結果生きている自分を実感し、さらに生きている人の中でも自分の存在は固有であると気づいたということ。

エ 両親が死んでしまった今、だれにも頼ることができず一人で生きていかなければならない自分が孤独な存在だと気づいたということ。

オ 空襲で多くの人が亡くなった中でも自分は確かに生きており、命が助かった自分は幸運な存在であると気づいたということ。

問7

——線部⑤「よっちゃんは何ぞあんなことができたんだろう」(8ページ)とありますが、茉莉がこのように思ったのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 食べ物が少ない中でも自分のものを分けてくれた美子にお礼を言わなかったことを思い出し、自分も世間の人と同じように失礼な人間であったと反省したから。

イ 力づくで手からものを取り上げられた感覚が残るなかで、優しくさし出された美子の手の記憶を思い出し、美子の優しさが実は偽善だっただのではないかと疑いはじめたから。

ウ 他人のものを平気で奪うような身勝手な世の中で、自分を中心に考えていた茉莉に対してさえも迷わず自分のものをさしだす美子のが、とても際立つて感じられたから。

エ 美子はためらうことなく茉莉にものを分けてくれたが、それは今思い直してみるととても優しい行為であり、世間の人もそのような態度を見習うべきだと思ったから。

オ 自分からものを取るようなひどい人が多くいるので、美子のように自分にもものを分けてくれる人もいることを思い浮かべて、つらい気持ちをなぐさめようとしたから。

問8

——線部⑥「けれども勝士は茉莉にわらって見せた」(9ページ)とありますが、勝士はなぜそうしたのですか。その理由を四十字以内で説明しなさい。

問9 ―線部⑦「指きりげんまんしておけばよかった」(11ページ)とありますが、このときの茉莉の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 清三の言葉によって母の死が決定的になったが、それでも母に会えない寂しさから、母の死を全く認めることができずもがいている。

イ いなくなつてようやく母の大切さや母から受けた愛情を実感し、家族を助けられず自分だけが生き残つたことを後悔している。

ウ 母が死んだという事実をついに理解し、母にもう会えないと実感することで、母に生きていてほしかったという思いがわきあがつている。

エ これまでなら辛い時には家族が助けてくれたのに、みんなが死んだ今それもかなわず、このまま苦しい状況が続くのかと絶望している。

オ 死んだ母とのやりとりを振り返ると、わがままを言つて母に苦勞をかけていた幼稚な自分が思い出され、情けなかったと恥じている。

問10 ―線部⑧「これまでずっと正しいと信じていたこと。それが揺らぎはじめていた」(13ページ)とありますが、これはどのようなことですか。ここまでの内容をふまえて百二十字以上百四十字以内で説明しなさい。

問11 ―線部⑨「ひとりでいいから、行つておいで」(15ページ)とありますが、このように言つた祖母の気持ちはどのようなものですか。五十字以内で説明しなさい。

問12 ……線部X「茉莉は声を上げることもできなかった」(3ページ)とときの茉莉と、……線部Y「こんなに大声を出したことはなかった」(16ページ)とときの茉莉はどう違いますか。茉莉がそのように変化した理由もふくめて九十字以内で説明しなさい。

問13 〔の部分(17ページ)から読み取れることの説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「母の言葉を思いだしていた」という言葉は、戦争が終わつても亡くなった母を思い出し続けて、一人だけ戦争から抜け出せず、冷静さを取り戻せない茉莉の様子を表現している。

イ 「玉碎するはずじゃなかったの?」「なんのためにみんな死んだの?」「なんでおかあちやまもおとうちやまも死んだのに、まだ生きている人たちがいるの?」という言葉では、問いを反復することで戦争と戦争に關係する状況への批判が表現されている。

ウ 「茉莉は信じられなかった。」から「まだ生きている人たちがいるの?」までの言葉は、最後の一人まで戦うという言葉があつてなく中身の無いものとなつてしまったことや、生き残っている人がある一方で自分の大切な人は死んでしまったという茉莉のやるせなさを表現している。

エ 「茉莉の問いにこたえるものはなかった。」という言葉では、戦争という大きな出来事においては誰にも説明できないような割り切れない状況や感情が伴うことが表現されている。

オ 「日中戦争の始まつた年に生まれた茉莉にとって、初めての、戦争のない日々が始まつた。」という言葉は、平和を当たり前に思う読者に平和を特別なものとして意識させる表現である。

注意：「、」「。」「」「」も一字に数えます。

受 験 番 号	
国	語

問 13	問 12	問 11	問 10	問 9	問 8	問 4	問 3	問 2	問 1		
								A	11	6	1
								B	12	7	2
									13	8	3
									14	9	4
									15	10	5